

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(本文の表記の一部を変えています。)

「自然保護」という言葉をよく聞きますが、なぜ人間にとって、自然が大事なのでしょうか。温暖化現象を防ぐため、生物多様性を保って自然界のバランスを崩さないためなど、理由はいくつも挙げられるでしょう。

ぼくはこう考えています。人間にとって自然が必要な理由は、人間には自然からしか学べないことがたくさんあるからだ、と。たとえば、都会のビルの谷間を歩いているときに、突然ゾウが走ってきたり、ワシやタカが舞い降りてきたりすることはありません。頭上から熟れた果実がぼたぼた落ちてくることもないでしょう。もしこんなことが街中で起これば、それは大アクシデントです。

でも、自然の中では、向こうから何がやってくるか、空から何が落ちてくるか、はたまた地面に何があるかもわかりません。予想できないことだらけです。

だから、①自然の中に身を置くのと、街の中に身を置くのとでは、人間の「構え」がおのずと変わってくるはずなのです。

次々と起こる予想もしないことにひとつひとつ対処をしながら生きていく、という構えを持つのか。それとも、想定内のところで安全かつ自分の思いどおりに生きていく、という構えなのか……。

今は、自分が思ったとおりにできないことがあると、すぐにイライラしたり、「失敗した」と思って、ひとつの出来事をとて重くとらえてしまったりする人が多いように見えます。

人に対しても同じです。②相手と話がうまくかみあわなかったり、自分の意見に賛同してくれなかったり、自分の期待どおりに動いてくれなかったりするときに、「嫌われているんじゃないか」とか、「裏切られた」とか、果ては「相手がおかしいんじゃないか」とまで思って③キズついてしまうことはありませんか。

でも、本当はそうではないはずです。相手と自分とはちがうのですから、思っていることもちがって当然です。また、相手の反応も数あるうちのひとつであって、絶対的なものではありません。相手と自分との間に、ある種の「遊び」や「間」^まがあつて、さ

らに少し「ズレ」があると気づくことが大事なのです。そして「ズレ」を認められれば、ちがう考えを持った相手とも、いっしょに歩いていけるはず。ようは、「構え」しだいということ。す。

そういうふうに見ていかないと、今生きている世界が、ガチガチに固められた、きゅうくつで息苦しいものになってしまうような気がしませんか。

自然の中に身を置いてみると、そのことが体でわかります。④、ジャングルの中に放りこまれたら、すぐに実感しますよ。思いどおりにいくことのほうがよっぽど少ない、と。

でも、「思いどおりにいかない＝失敗」ではなくて、どうしたらいいかを考えるチャンスと考えればいいのです。思いどおりにないことに出会った瞬間が、じつは、ものごとのはじまりであって、前に進むための扉を開けるきっかけなのです。

人間にとって自然が必要なのは、こんなふうには、しなやかな構えを肌で感じ、生きる知恵として自分のものにしていくためなのではないでしょうか。

みなさんは、親があれこれ口を出してくるのを、うっとうしく感じたことはありませんか？ ⑤、耳の⑥イタいことをいつてくる友だちに「放っておいてよ」と思うことがあるかもしれません。

なぜこんな「おせっかい」を焼くのかというと、人間は信頼に注1固執するからです。信頼しているからこそ、相手の考えていることや感じていることに共感したいのです。信頼していない相手と共感したいとは思わないですよ。それは、人間が信頼できる関係が築ける大きさの集団を作り、その中で共感を育てていったことを見ても、はつきりしています。

⑦、最近は少し事情が変わってきました。大家族のしがらみや、共同体の人間がおせっかいを嫌って、自由を追求した結果、信頼も共感も薄まった社会、おたがいに頼りあうのが難しい、孤独な集団を作ってしまった。

⑧、信頼や共感を土台にした、おせっかいを焼きあう社会に戻ったほうがいいのかというと、これもまた度が過ぎると、やっかいなことになる可能性があります。

たとえば、だれかと「おいしいね」といいあいながら食事すると、幸せな気分になります。一見共感しあっているように見えま

すが、味覚は共有できませんから、相手も自分と同じようにおいしいと思っ
ているかどうかは、本当はわかりません。さらにいう
と、だれかと何かを共感できる能力に自己⑨「マゾク」している面も、少な
からずあるのではないのでしょうか。

ですから、共感が過剰になると、暴力につながることもあるのです。「なん
でわかってくれない？」と、共感を強要していること
に気づかないまま、愛が憎しみに変わってしまうように。⑩共感
は「注② 諸刃の剣」でもあるのです。

どうやら共感や信頼が薄まった孤独な社会も、共感や信頼が濃すぎる社会
も、どちらも生きづらそうです。いったい、どうすれ
ばいいのでしょうか。

ぼくは、「自然」本来のつきあい方にヒントがある、と考えています。

たとえば、ゴリラのフィールド・ワークをしていて、ぼくがピンチにおち
いても、ゴリラはぼくを助けてはくれません。そう
いう意味ではゴリラは冷たいといえるでしょう。

でも、つきあっていけばいくほど、そばに居ることを許してくれたり、い
つしよに遊んでくれたりすることもあります。そうい
う意味では、とても懐が深いのです。

木の洞でぼくといっしよに雨宿りをしたタイタスは、家族が密猟者に襲
われて、父親やたくさんの友人を殺されました。母親や
姉さんは別の集団へ移り、ほかの二頭のオスととり残されてしまいました。
ようやく乳離れをしたばかり、四歳のときのことです。
彼にとっては、人間はどうしたって許せない「敵」のほ
うです。ぼくらが逆の立場だったら、かならずそう思
うでしょう。

にもかかわらず、タイタスは「敵」であるはずの人間のぼくを信頼してく
れて、無邪気で無防備な姿をさらしてくれたのです。
ほかのゴリラも、仲間が人間に襲われても、敵に
対するとは思えない態度で接してくれました。これを「
覚えていないからだろう」といつてかたづけ
る人もいますが、そんなことはありません。彼ら
は記憶力がとてもいいのです。

⑪それでもなお受け入れてくれる懐の深さは、
やっぱり、彼らの、あるいは自然の持っている
しなやかな力強さゆえではないか、
と思うのです。

こういう、冷たくて懐が深い、しなやかなつき
あい方を出発点に定めて、人間の社会をどう
作っていけばいいか、考えてみたら

どうでしょうか。人間は、ある意味ではもつと冷たくてもいいけれど、同時に、他者をもつと受け入れる懐の深さがあったもいい。「受け入れる」ということを、頭で考えると難しいかもしれませんが、ぼくたちのいちばん身近にある自然＝自分の体に聞いてみると、わかりやすいかもしれません。

人間の体には、もともとさまざまな能力が備わっています。自然の中で暮らすことをやめてしまった今、使われていない能力もたくさんありますが、完全に失ってしまったわけではありません。まずは、どんなものなら受け入れられるのか、自分の体に聞いてみる。そこからはじめればいいのです。

たとえば、ぼくらは、ケンカの注3罵声ばせいや、工事現場で注3キカイきがいがガチャガチャいう音はうるさいと感じますが、鳥のさえずりや秋の夜長の虫の鳴き声、子どもたちが遊ぶ元気な声をうるさいとは感じません。そういうことは、頭で考える前に、自分の体が感じることです。

自分の体に聞いてみることを意識しだすと、今の社会が、人間が本来豊かだと感じる社会からずいぶん遠くはなれてしまっているということも、注14これからどんな社会を作っていくのかというヒントも、見つかるとはなりません。

それには、どうしても人間以外の動物がいないとダメなのです。やっぱり人間を映し出す「鏡」が必要だというわけです。注15ゴリラたちは、そのよき鏡になってくれると、ぼくは信じています。

〔15歳の寺子屋 ゴリラは語る〕山極寿一

注1 固執・・・自分の考えや意見をかたくなに守ってゆずらないこと。

注2 諸刃の剣・・・一方ではきわめて役に立つが、他方では大きな危険をもたらすおそれのあるものたとえ。

注3 罵声・・・非難してさわぐ声。

問一 ――部①「自然の中に身を置くのと、街の中に身を置くのとでは、人間の『構え』がおのずと変わってくるはずなのですが、とありますが、

(1) ここでの「構え」の意味として、最も適当なものを次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 意志 イ 姿勢 ウ 能力 エ 特性 オ 気分

(2) 筆者は人間の「構え」がどのように変わると考えていますか。次の文の空らんA・Bに入る最も適当な言葉を、それぞれ三十文字以内でぬき出しなさい。

自然の中では A という「構え」だが、街の中では B という「構え」になる。

問二 ――部②「相手と話がうまくかみあわなかったり、自分の意見に賛同してくれなかったり、自分の期待どおりに動いてくれなかったりするとき」とありますが、そういう場合どのような「構え」を持つべきだと筆者は考えていますか。解答らんに合うように三十文字以内で説明しなさい。(句読点は字数に入れます。)

問三 ――部③・⑥・⑨・⑪・⑬のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。

問四 筆者が人間にとって自然が必要だと考える理由が書かれている一文を文中から二つぬき出し、初めと終わりの五字を書きなさい。(句読点は字数に入れます。)

問五 部④・⑤・⑦・⑧に当てはまる言葉を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア つまり イ あるいは ウ ところが エ では オ たぶん カ そして

問六 ――部⑩「共感は『諸刃の剣』でもあるのです」とありますが、その内容を具体的に説明したものととして最も適当なものを次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 共感が過剰になると、相手が自分の意見に賛同してくれないとき裏切られたと思い、心が折れてしまうということ。

イ 信頼は人間にとつて必要なものであるが、共感の度が過ぎると悪い結果をもたらすので、必要ではないということ。

ウ だれかと共感しあえばしあうほど、相手も自分もますます幸せになり、お互いの関係性もより深まるということ。

エ 信頼や共感を求め、必要以上におせっかいを焼いてしまうと、かえって孤独な集団をつくってしまうということ。

オ 共感はお互いの孤独感をやわらげてくれるが、共感を相手に強要するという暴力につながることもあるということ。

問七 —— 部⑫「それでもなお受け入れてくれる懐の深さ」とありますが、筆者はどんなところを懐が深いと言っているのですか。
解答らんには合うように四十字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れません。)

問八 —— 部⑭「これからどんな社会を作っていったらいいのか」とありますが、筆者が考える理想の人間社会を述べたものとして、最も適当なものを次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 余計なおせっかいを避けるために、相手がピンチにおちいってもそっけなくふるまう社会。

イ 必要以上に関わろうとはしないが、相手と自分の違いを認め、相手を広く受け入れる社会。

ウ 何よりもまず自由を追求することで、お互いに口出しをせず自分の思い通りにできる社会。

エ 共感にこだわり続けることで、相手との関係をより深め、お互い頼りあうことができる社会。

オ 自分にとつて相手が敵かどうかをよく考え、注意深く相手との関係を築いていこうとする社会。

問九 —— 部⑮「ゴリラたちは、そのよき鏡になってくれると、ぼくは信じています」とありますが、「そのよき鏡になってくれる」とはどういうことですか。五十字程度で説明しなさい。(句読点は字数に入れません。)

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(本文の表記の一部を変えています。)

〔結城沙耶は、中学時代、陸上部でハードルの選手だったが、試合で転倒しゴールできなかったことをきっかけに陸上部を辞めた。高校に入学した後、親友の花奈に誘われて射撃部に入部した。沙耶は入部するまで全く射撃の経験がなかったが、初めての練習試合で全国大会に出場できるぐらいの驚くべき成績を残した。〕

練習試合が終わり、関谷第一の選手たちが引き上げた後、沙耶は磯村監督に呼ばれた。

〔結城〕

「はい」

「①今日の結果に驚いどるか」

「はい」

正直に答える。

ものすごく驚いていた。

「まさか400点台を出せるなんて、考えてもいませんでした」

「じゃ、何を考えとった」

「え?」

質問の意味が解せない。沙耶は唇を結び顎を引いた。

「あの試合中、ライフルを構えて何を考えとったんだ」

磯村監督はやや口調を緩め、問い直してきた。

②それでも、すぐには答えられなかった。

「何を……」

考えていただろうか。

「標的のこと、でしょうか」

「うん？」

「標的 です。練習のときは違^{ちが}つて……、どう違うか上手く説明できないんですが、違^{ちが}つて、それで……怖^{こわ}かったです」

「怖い、か」

磯村監督の目が細められた。無意識なのだろう、唇を軽く舐^なめる。その仕草^{しぐさ}が小学生の弟、直哉^{なおや}を思い起こさせる。似ているわけがないし似てもいないのだが、どことなく繋^{つな}がってしまう。

「うん？ 結城、何がおかしい」

「あ、いえ。何も……」

「そうか。笑ったみたいじゃったがな。で、標的が怖いってのは、どういうことだ。もう少し、きちんと説明できるか」

「できません」

「即答^{そくとう}か。結城、もう少し言語力を磨^{みが}け。自分の思^{おも}うたこと、考えたことを言葉にして他人に伝える。いわゆるコミュニケーション能力は、これからますます必要になるんじゃないぞ」

「……はい」

「はなからできないなんて一言で片づけるなや。できる限り、言葉にしてみい。その努力はこれから先、必ずおまえのためになる」
磯村監督は完全に教師の物言いになっていた。まるで注^注1 口頭試問を受けているようだ。でも、わかる。

監督は本気であたしの答えを聞きたがっている。

わかる。

沙耶もそつと下唇を舐めてみた。

「……あの、練習のときは、ちゃんと撃つ、正しく撃つみたいなのをずっと考えていました。あたし、入部するまでライフルに触ったこともなかったの、余計にちゃんと正しく覚えなきゃって考えてました。周りより遅れている分、がんばらなくちゃって…」

真面目だなど評されるかとも思ったが、磯村監督は何も言わなかった。促すような注²首肯を一度したきりだった。

③ほつとする。

真面目なんかじゃない。真剣に射撃と取り組む覚悟ができたわけでもない。まだまだ中途半端だと、自分自身が一番、わかっている。

④あたしは中途半端だ。

でも逃げたくない。

今度逃げたら、心底から自分を許せなくなる。

⑤ハードルに背を向けた沙耶を、花奈は射撃という未知の世界に⑥ミチビいてくれた。足を踏み入れた世界をどう進むかは沙耶しだいだ。

花奈に報いなくちゃ。

そんなりきみがあった。真面目ではなくりきみだ。それが……。

「試合になったら、いつの間にか消えてたか」

にやっ。磯村監督が笑う。

「はい、消えてました」

誰かのため。自分のため。何かのため。そんな「ため」は知らぬ間に消えていた。

ただ、標的だけがある。

少し怖かった。

未知の世界が怖い。そして昂ぶる。

知らない世界がここにある。

息を整え、標的に向かい合う。

重くて暑くて、身に着けたとたん自由が奪われるように感じたジャケットが、かちりと身体を支えてくれる。手のひらに伝わるライフルの重量も安定のための重石になってくれるようだ。ただ、構えが乱れば支えはもろく崩れてしまう。

そんな諸々が⑦のリロンではなく実感として、沙耶に迫ってきた。

沙耶は受け止める。

試合時間、三十分。その間、この安定を維持する。乱れず、崩れず、標的に挑み続ける。

ものすごく久しぶりだな。

最初の一射の後、沙耶は小さく息を吐きだした。

この感覚、久しぶりだ。

試合前の緊張感と昂ぶり、集中と注3弛緩のバランス、そして、怖れと興奮。

本当に久しぶりだ。久しく忘れていた。

一瞬、ほんの刹那、ハードルの並んだトラックが見えた。風が舞って、光が差す。競技場の風景は瞬き一つの間に霧散していた。

息を整える。

ライフルを構える。

二射、三射……。標的を見据え、引き金を引く。

やはり消えていく。

緊張も昂ぶりも久々だと震える心も、撃つたびに、引き金に指をかけるたびに薄れて、消えていく。

沙耶とライフルと標的だけが残った。

「……陸上と射撃って、まるで違うのにとてもよく似ている。そんな風感じて……。⑧でも、陸上ではできなかったんです」
「できなかった？」

「はい。あたし……中学のときに陸上部でハードルやってみました。走るのも跳ぶのも好きでした。でも、試合のとき、ハードルだけを見ることができたかって言われると、ちょっと、よくわかりません。⑨キロクを伸ばさなきゃとか考えてたり、他の選手の調子が気になったり……。でも、今日はそんな風じゃなかったんです。まだ、ビームライフルの試合がよくわかってないってのもあるとは思うんですけど……。思うんですけど、でも、あの……できたんです。他のこと考えないで、撃つことだけ考えられた気がして……」

磯村監督はほとんど言葉を挟まず、⑩トキオリ、軽く頷きながら聞いていた。いつの間にか、心にあったこと、漠然と感じたこと、沙耶なりに考えたことをあらかた、ぼそぼそとしゃべっていた。

「結城」

しゃべり終えて口中の唾を呑み込んだとき、磯村監督に改めて呼ばれた。

「はい」

「おまえは伸びるぞ」

「え？」

「⑪これから、どんどん強うなれる。オリンピック出場も夢じゃない」

「はあ？」

我知らず顎を引いていた。

オリンピック？ どうして、そこまで話が飛んじやうの？ 冗談？ だとしたら、あまり上等じゃないと思う。もうちょっと現実味のあるジョークでないと笑えない。

花奈ならここで楽し気に笑いもするのだろうか、沙耶には無理だ。愛想笑いなんて、できない。

磯村監督が眉根^{まゆね}を寄せる。

「おれがいい加減な冗談を言うてると思うたか」

「いえ、いい加減だとは……」

「冗談だとは思ってたわけか」

「はい」

思ったというか、そうでしかありえないだろう。

喉^{のど}が渴いたなど、沙耶はわずかにうつむいた。

「違うぞ」

「はい？」

顔を上げる。磯村監督の視線がぶつかってきた。

「おれは冗談なんか言うたらん」

「はあ、でも……」

冗談でなければ^⑫ガンボウだろうか。

「冗談やないって、今にわかるぞ」

そこでまた、磯村監督は笑ってみせた。

注1 口頭試問……試験官の質問に対し、口頭で答えさせる試験のこと。

注2 首肯……うなづくこと。

注3 弛緩……ゆるめること。

問一 ―― 部① 「今日の試合に驚いとるか」「はい」とありますが、沙耶はどのようなことに驚いているのですか。二十字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れません。)

問二 ―― 部② 「それでも、すぐには答えられなかった」とありますが、沙耶が監督の質問にすぐには答えられなかった理由として最も適当なものを次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 試合について質問する監督を怖く思っていたから。

イ 質問に対して答えるべきかどうか迷っていたから。

ウ 結果に対する喜びで何も考えられなかったから。

エ 自分でも何を考えていたか意識してなかったから。

オ 監督にされた質問の意味が分からなかったから。

問三 ―― 部③ 「ほっとする」とありますが、沙耶がそのような反応をしたのはどうしてですか。三十字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れません。)

問四 ―― 部④ 「あたしは中途半端だ。でも逃げたくない」とありますが、この時の沙耶の気持ちを三十五字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れません。)

問五 ―― 部⑤ 「ハードルに背を向けた」とありますが、具体的にはどういうことですか。十五字以内で説明しなさい。(句読点は字数に入れません。)

問六 ―― 部⑥・⑦・⑨・⑩・⑫のカタカナを漢字に直しなさい。

問七 ―― 部⑧ 「でも、陸上ではできなかったんです」とありますが、沙耶は陸上ではどのようなことができなかったのですか。文中の言葉を使って二十五字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れません。)

問八 本文の内容に合わないものを次のア～カの中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 沙耶ははじめは練習試合の最中に自分が考えていたことをはっきりとは意識していなかったが、監督の質問によって少しずつ自覚するようになった。

イ 監督が沙耶に自分の考えていることを説明するように求めたのは、沙耶の将来を考えたときに、彼女に必要な力であると思ったからである。

ウ 沙耶は中学の時に陸上部から退部したことをくやんでいるが、陸上をやっていた時の経験が今回の試合にかされ、良い成績を残すことができた。

エ 監督は沙耶の答えを聞くうちに沙耶に射撃の素質があることを改めて確信し、沙耶がオリンピックに出場できるぐらいの選手になると本気で信じている。

オ 沙耶は最初を感じたことを言葉にしようとする意識がなかったが、監督からの働きかけで自分の思いを言葉で表して伝えようとし始めた。

カ 沙耶が今回の練習試合で素晴らしい成績を残すことができたのは、自分を助けてくれた花奈の思いにこたえたいという気持ちがあったからである。

問九 — 部⑩「これから、どんどん強うなれる。オリンピック出場も夢じゃない」とありますが、磯村監督はなぜ沙耶がオリンピックに出場できると思ったと考えられますか。文中の言葉を使って、簡潔に答えなさい。